慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グリム・メルヘンに登場する4人の「魔女」たち : 魔女・魔法使いの女・賢女・老婆
Sub Title	Die magischen Frauen in den Grimmschen Märchen : Hexe, Zauberin, weise Frau, alte Frau
Author	大淵, 知直(Obuchi, Tomonao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.160(253)- 177(236)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

グリム・メルヘンに登場する4人の「魔女」たち
——魔女・魔法使いの女・賢女(けんにょ)・老婆——

大淵　知直

グリム・メルヘンに現れる登場人物を思い浮かべる時，そこには必ず魔女の姿がある。王子様やお姫様といった憧れの対象となる者たちと共に，意地の悪い継母や，魔女といった悪の代表者たちもメルヘンの世界に欠かすことは出来ない。むしろ時として，憧れの対象となるメルヘンの主人公たちよりも，悪の化身たちの方が，異彩を放ち，実際の主人公たちをしのぐ強烈な印象を読者に与えることすらある。その読者たちの脳裏に刻み付けられている魔女たちの姿は，概して，全身黒ずくめの，腰の曲がった老婆であり，顔はしわだらけで，鼻は鋭く曲がっている。そしてその老婆は，長い杖で身を支えているが，時として箒に跨り空を飛ぶこともある。メルヘンの魔女たちは，まさにこのような姿で絵本などのメディアの中を跋扈している。その姿は，現代の各メディアに登場する，悪役を演じることの少なくなった，かわいらしい「魔女」とは一線を画している。

しかし，その一方でグリム・メルヘンの中に登場する魔的な力を有する女性たちは，常に悪に荷担しているわけではない。不思議な力を持った女性が，主人公に救いの手を差し伸べ，解決の糸口を与えるメルヘンも少なくない。本論においては，グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヘン集』(1)の中に登場する不思議な力を持つ様々なタイプの女性たちを見ていく中で，「魔女」たちが，メルヘンの中でどのような姿をし，その役割を果たしているのかを概観していく。

1. 4人の「魔女」たち

日本に紹介されているメルヘンの中で魔女は，魔法を用いる女性程度の意味に解され，魔法使いの女とほぼ同義に用いられることも多い。しかし，グリム・メルヘンの中では，複数のタイプの不思議な力を持った女性，「魔女」たちが登場し，彼女たちがそれぞれはっきりと峻別されていることを最初に確認しなければならない。

まず，グリム・メルヘンの中で，不思議な力を持つ女性たちは，主に四つの名前で呼ばれている。例えば，ヘンゼルとグレーテルが森の中のお菓子の家で出会う女性は，「魔女（Hexe)」であるが，KHM12『ラプンツェル』で，生まれたばかりの赤子を両親のもとから奪い去るのは「魔法使いの女（Zauberin)」である。さらに，いばら姫を百年の眠りにつかせる女性は，「賢女（weise Frau)」という別の女性である。また，KHM103『おいしいおかゆ』で，空腹を抱えた少女に森の中で，呪文によって無限におかゆを炊き続ける鍋を与えるのは，単なる「老婆（alte Frau)」である。いずれも人智を超えた力を持つ，日本語に翻訳されたメルヘンの中では「魔女」ないし「魔法使いの女」とされかねない女性たちであるが，グリム・メルヘンの中では，この4人がそれぞれ「魔女」「魔法使いの女」「賢女」「老婆」といった異なった呼ばれ方をしており，その呼び分けには何らかの法則が見え隠れしている。

それでは，魔力を持ったこれら4人の女性たちは，『メルヘン集』において，それぞれどれほどの頻度で登場しているのであろうか。

4人の中で最も頻繁に登場する女性は，魔女（Hexe）である。このHexeという語は，グリム・メルヘン200話中20話[2]にわたり計68回使用され，10話に1話は，Hexeという語が用いられていることになる。しかし，その20話の中には，Hexeという語が用いられつつ，実際には魔女が登場しない物語が5話含まれている。例えば，KHM27『ブレーメンのおかかえ楽隊』では，森の中の家に陣取った動物たちに脅かされた強盗が，あまりの恐ろしさに「身の毛もよだつような魔女」が家の中にいると誤解

し逃げ去っていく。またKHM65『千びき皮』では，黄金の指輪や糸繰り車を王様に供するスープの中へと忍ばせる女主人公を，料理番が不審に思い，彼女のことを「魔女のようだね」とたとえるが，実際に彼女が魔女であるわけではない。

さらに，この2話を除いた残り18話のうち，3話[3]においては，魔女の呪いにかかっていた人物が登場するのみで，魔女自身は登場しない。代表例は，KHM1『蛙の王様』である。このメルヘンにおいて王子は，悪い魔女に呪いをかけられ蛙の姿になっていた，という説明があるが，その悪い魔女自身は登場しない。従って，グリム・メルヘンの中で，20話にHexeという語は用いられているが，登場人物として魔女が現れる物語は15話ということになる。それに対し，魔法使いの女（Zauberin）は4話[4]，さらに賢女（weise Frau）は7話[5]，そして正体は明かされないが不思議な力を持つ老婆（alte Frau）は8話[6]に登場する。

魔女の登場頻度が，他の3人の女性たちに比べるとやや多いが，その3人の登場回数も例外的といえるほど少ないものではない。では，これら4人の女性たちの呼称は，それぞれどのような背景を持ち，使い分けられるに至っているのであろうか。

まず，登場数の最も多い魔女（Hexe）であるが，この言葉には，中世の忌まわしき異端審問「魔女裁判」のイメージが常に付随する。そのキリスト教の投げかけた暗い影により，文学の中でもゲーテの『ファウスト』におけるヴァルプルギスの夜の情景を筆頭に，悪魔と結託した悪の化身として描かれることが多い。また語源的な定説はないが，Hexeという語は，古高ドイツ語hagazussaに遡るとされている。この古語の前半部分hagは，「農家（居住空間）と境を接しつつ，そこには属していない領域」転じて，生け垣等を意味し，語の後半部分は，「超自然的存在」を意味した。このことから，生け垣あるいは，屋根の棟に跨る者をも意味していたとされる[7]。つまり，Hexeという語には，日常空間の外である異界に住まいつつ，境界である生け垣を越え，日常空間を脅かす者といった語源的な意味合いがこめられているのである。

次に，魔法使いの女（Zauberin）であるが，Zauber（魔法）という語は，Hexe の原形が10世紀頃より用いられていたのに対し，さらに古く既に 8 世紀にその古形が用いられていたが，明確な語源は不明である。ただ，呪術の際に用いられるルーン文字を描いた赤い代赭石に関連があると推測されている[8]。Zauberin は，その呪術を操る女性といった程度の意味である。

それに対し，日本では馴染みの薄い，賢女（weise Frau）という呼ばれ方をしている女性の出自は，魔女や魔法使いの女とは本質的に異なる。彼女は，元来ゲルマン民族の運命の女神であり，ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』によると，賢女は人間と神との橋渡しをする半神格的存在と位置付けられ，彼女たちの最大の務めは人の運命を紡ぎだすことであり，誕生の際に現れ，その赤子の運命を予言し，また天分を授けたり，合戦場に現れその戦いの結末を予言したりする，とされている[9]。いわば，「妖精（Fee)」が fata に遡るロマンス語系の運命の女神であるのに対し，賢女は，ゲルマン民族の運命の女神であるということができる。

最後に，老婆（alte Frau）であるが，彼女の存在に対し，語源的に遡及することは無意味であろう。しかし，老婆という存在は，二つの意味において，超自然的存在に近い。第一に，女性であるということ。メルヘンの中で魔的な力を持ち合わせる者は，男性であるよりも女性であることが圧倒的に多く，男性の登場人物がそのような力を持つことは極めて稀である[10]。そして第二に，齢を重ねているということである。メルヘンにおいて年老いた者，特に年老いた女性が，社会的な関わりの中に生活していることは少なく，それ故に此岸の世界よりも，彼岸である異界に近い者として理解され，扱われることが多い。年老いた女性は，その存在のみで，メルヘンの中では，彼岸に極めて近い存在として解されるのである。

このように，メルヘンの中で超自然的な力を持つという意味において共通するこれら 4 人の女性たちであるが，その呼称には，それぞれ異なった意味合いが含まれている。では，次にこの独自の背景をそれぞれ持った 4 人の「魔女」たちがメルヘンの中に，どのような形で登場するのかを見て

いこう。

2．「魔女」の棲家

超自然的な力を持った女性たちは，その多くの場合，ヘンゼルとグレーテルがお菓子の家で魔女と出会うように，主人公と遭遇することによって物語の一員となる。では，その彼女たちは一体，どのような場所でメルヘンの主人公たちを待ち構えているのであろうか。

先述のとおり，実際に魔女が登場するグリム・メルヘンは15話であるが，その15人の魔女たちの潜んでいる場所には大きな共通点がある。メルヘンの中で魔女に遭遇する可能性の最も高い場所，それは森である。15人の魔女のうち，9人までが森を棲家としている，もしくは，森を活動の拠点としている(11)。「異界に住まいつつ日常生活を脅かす者」である魔女は，グリム・メルヘン200話中91話に表れる，メルヘンの中で最大の異界の地，森に棲み，そこで主人公たちと遭遇する。そして，森に棲むその魔女たちは，いずれも森の中で主人公を持ち構えているのみで，自ら森を出て主人公たちの世界へと赴くことはしない。Hexeの語義に鑑みると，彼女たちは異界から日常世界に迫る脅威として考えられるが，主人公を中心にストーリーを語っていく，いわば主人公の旅の物語であるメルヘンにおいて，脇役の一人である魔女が自ら行動を起こし，主人公に近付くことはない。

また，森に潜む魔女は，9話のうち6話(12)において，「森の中の小さな家」に暮らしている。KHM122『キャベツろば』においてのみ，魔女は娘と共に立派な御殿に暮らしているが，それ以外の魔女たちは森の中の家にひっそりと暮らしている。このことは，魔女こそ登場しないがKHM26『赤ずきん』において，おばあさんが森の中の家に独り暮らしていることをも連想させ，森に棲む魔女が単に社会的アウトサイダーであるだけでなく，おば捨てとの関連の中で存在していることをも推測させる。

では，残る6名の魔女は，どこに潜んでいるのであろう。KHM193『たいこたたき』に登場する魔女は，「山の上の平地の古い石の家」に

暮らしており，その家の背後には，真っ黒な森が控えているという。この魔女の場合も，異界という意味では，森の中に暮らす9名の魔女たちと同じである。また，KHM51『めっけ鳥』の魔女も，森番の料理番を務めており，異界である森の周囲に暮らす。

森から離れて暮らす，残る4名の中で3名は，いずれも継母たちである。15名の魔女たちの中で，継母の役割をも果たしている者は4名[13]いるが，KHM22『なぞなぞ』の魔女は，継母でもあるが，森に暮らし，また実子を持たないという点において，他の3名とは性格を異にしている。実子を持つ3名の魔女である継母たちは，主人公たちを森へと追い込むことはあっても，森の中には棲んでいない。彼女たちは，日常生活の空間の中に暮らし，必要が生じた時に，主に自らの子を利するために，その本性をあらわにする。森に棲む魔女が，その悪意を異界へと入り込んでくる不特定の人物へ向けるのに対し，継母でもある魔女たちは，その悪意を彼女の回りの特定の人物へ向けるのである。

次いで，4話に登場する魔法使いの女たちであるが，彼女たちも全て森と関係を持つ。4話のうち，KHM12『ラプンツェル』を除いた3名の魔法使いの女たちは，いずれも森の中で主人公を待ち受けているという点で，魔女と共通している。しかし，KHM12『ラプンツェル』の魔法使いの女は，農園を夫婦者の家の隣に持ち，その活動の場を日常世界と隣接させているという点において，他の魔法使いの女たちや，魔女たちと異なる。これは，この魔法使いの女が，1812年刊行の『メルヘン集』初版の段階では，妖精（Fee）と記されており，グリム兄弟の修正加筆の過程において，魔法使いの女へと書き換えられた事実と密接な関係を持っている。前述のとおり，妖精は元来，運命の女神であり，グリム兄弟は，書き換えの過程において，妖精をゲルマンの世界の運命の女神である賢女へと置き換えていった。しかし，妖精たちの中で，唯一赤子を奪ったり，恋人同士の仲を引き裂いたりと，「悪」の要素の強い『ラプンツェル』の妖精だけは魔法使いの女へと書き換えられた。従って，このKHM12の魔法使いの女は，他の3人の魔法使いの女たちと，同じ呼称を用いられてはいるもの

の，本質の全く異なる者であり，彼女だけ，森の外に所有地を持つに至っている。しかしその一方で，ラプンツェルを幽閉する塔は，森の中にあり，森との関係をも絶つことは出来ない。

では，ラプンツェルの魔法使いの女と，歴史的に共通の部分を持つ賢女たちはどのような場所に現れるのであろうか。賢女の登場するメルヘンは7話と前述したが，そのうちKHM49『六羽の白鳥』では，賢女が力をこめた糸の玉が登場するのみで，賢女自身は姿を見せず，また，KHM179『泉のそばのがちょう番の女』においても，賢女は，ストーリーの本編部分では魔女として扱われるため，メルヘンの中に実際の賢女が描かれている物語は5話にとどまる。

その5話のうちKHM50『いばら姫』においては，13人の賢女が登場するが，彼女たちは，初版段階においては，妖精（Fee）であったという点において，『ラプンツェル』の魔法使いの女とその性格を共有している。しかし，『いばら姫』の賢女たちは，いばら姫の誕生の宴の席に登場し，彼女の人生へ贈り物をしたり，予言をしたりするという点において，本来の運命の女神としての性格を『ラプンツェル』の魔法使いの女よりも色濃く持っている。このような性格は，魔女や他の魔法使いの女たちは一切持ち合わせない。また，賢女たちが，空間的な異界の地ではなく，誕生という特殊な意味合いの場とはいえ，日常生活の空間の中に登場するという点においても，魔女や魔法使いの女たちとは一線を画す。

賢女が登場する他の4話のメルヘンを見ると，KHM56『恋人ローランド』とKHM141『小羊と小ざかな』においては，登場人物が助言を請うために自ら賢女を訪ね，KHM130『一つ目，二つ目，三つ目』では，窮地に陥っている主人公のもとへと賢女が自ら姿を現す。いずれも，主人公の日常の行動範囲の中に賢女は現れる。唯一，KHM122『キャベツろば』においてのみ，賢女は森の中で狩人と行き交う。一見，異界に現れているように思われるが，登場シーンを細かくみると，賢女は，狩人が森の中で猟の待ち伏せ場へ行く途中に現れている。つまり，森を生業の場としている狩人にとって，そこは，森の中とはいえ日常生活の空間の一部なのであ

り，王子たちが道に迷い魔女に遭遇する森とは，森の意味するところが全く異なる。このように，いずれのメルヘンにおいても，賢女たちが登場する場は，空間的には彼岸の地ではなく，此岸の内の日常の世界ということができる。

最後に，不思議な力を持った老婆たちはどうであろうか。正体の明かされない8人の老婆の現れる場所は，魔女，魔法使いの女，賢女たちと異なり一定しない。KHM9『十二人兄弟』，KHM29『黄金のけが三本はえてる鬼』，KHM103『おいしいおかゆ』の3話においては，老婆は森の中に，またKHM125『悪魔と悪魔のお婆さん』では，野原に，というようにいずれも日常空間の外に現れる。しかし，KHM150『こじきばあさん』とKHM186『ほんとうのよめさん』では，老婆の方から主人公のもとへと現れ，またKHM96『三羽の小鳥』とKHM133『おどりぬいてぼろぼろになる靴』では旅の途上で主人公と行き交う。ただし，KHM96の場合，途上とはいえ，川岸という境界の地に登場するという点が異界との関連で注目に値する。しかし，このように8人の老婆たちの登場する場所は，魔女や魔法使いの女たちのように異界であることもあれば，賢女たちのように日常の生活空間に近いこともあり，全員に共通するような明白な登場の法則を見出すことは出来ない。

このように，4人の不思議な力を有する女性たちの登場方法を概観すると，継母を除いた魔女と魔法使いの女は，森に代表される空間的な異界の地に現れるという点において共通しているが，賢女たちは，空間的には日常生活の場の内にあるものの，誕生や苦境といった，その中に一時的に生ずる，ある意味，時間的な異界に登場することがわかる。そして，老婆たちの中には，登場する場所という点においては，その両方のグループの性格を持った者が混在している。

3．妨害者としての「魔女」—魔女と魔法使いの女

それでは，この四者四様の登場方法をもった「魔女」たちは，一体メルヘンの中で，どのような役割をその魔力で果たしているのであろうか。メ

ルヘンの「魔女」たちは，その不思議な力によって，主人公の歩む道筋に決定的な影響を及ぼし，ストーリーを追う物語であるメルヘンの転回点を作りうるという点において，極めて重要な役割を果たしていることが多い。ここでは，4人の「魔女」たちの持つ力と同時に，メルヘンの中での役割を見ていきたい。

まず，魔女（Hexe）であるが，彼女のメルヘンの中での役割を端的に表しているのは，Hexe という語に付されている形容詞であろう。最も多く用いられている形容詞は alt であり，die Alte という名詞化された形も含めると，Hexe という語が用いられている20話のうち15話に見出すことができる。描写欲を持たずに，ただ指名するというメルヘンの話法にもかかわらず，これだけの高い頻度で，alt と Hexe が結合しているということは，この二つの語が単に記号的に結合していることを表している。メルヘンの中で，年老いている者は，彼岸の存在であることが多く，ここで alt は，年齢を表すというよりも，彼岸の存在であるということを象徴的に表す働きを持っている。

その alt に次いで6話に用いられている形容詞が böse である。「善」と「悪」の二つの色分けしかもたないメルヘンにおいて，この語に象徴されるとおり，Hexe は，常に主人公と対立する悪を体現した人物として登場する。また，魔法使いの女や賢女，老婆たちに彼岸者の記号である alt が付されることはあっても，böse が用いられている例が一つもないことを考えると，グリム・メルヘンの中で Hexe が，悪の代表としていかに大きな役割を持たされているのか推し量ることができる。

また，グリム兄弟は，版を重ねるにつれて行った加筆の過程において，魔女に対する特徴の描写を付け足しているが，このことは同時にまた，彼らが，魔女を悪の具現者として非常に重要視していたことを表している。例えば KHM15『ヘンゼルとグレーテル』には，初版にはない次のような魔女の説明的な描写が挿入されている。「魔女というものは赤い目をしています。そして遠くが見えないものです。けれども動物と同じで，鼻がよく利くもので，人間どもが近寄ってくると，においで，それがわかるので

す。」[14]また，KHM193『たいこたたき』には「顔は渋紙いろで，目の赤いばあさんが，戸をあけてくれました。婆さんは長い鼻へ眼鏡をかけていて」[15]という描写がある。さらに，「赤い目でじろりと」[16]見たり，「頭をがくがくさせながら近付いて」[17]きたりとメルヘンの指名という話法を完全に放棄した描写が魔女に対しては多く見られ，そこには今日抱かれている魔女のイメージに近い姿を見ることができる。

それでは，その悪の代表者である彼女たちは，メルヘンの中で実際にどのような悪行を働いているのであろうか。彼女たちがその魔力を用いて行う最も代表的なものは，変身である。ここにいう変身とは，魔女が自らの姿を変えるのではなく，相手の姿を変えることであり，メルヘンの主人公たちは，蛙[18]，鹿[19]，白鳥[20]，石[21]，木[22]，老人[23]といった実に多様な姿に魔女の力によって変えられてしまう。これら変身の術が用いられる際，魔女には何の動機も必要ではなく，そこで重要なのは，主人公たちが救済を必要とする状況へと陥らされることだけである。また，変身の術に続き，人喰いを含む殺人も多く見受けられるが，KHM43『トゥルーデおばさん』を除き，いずれの場合もその企ては未遂に終わる[24]か，成功しても後にその被害者はKHM11『兄と妹』のように再び生き返る。さらに，継母でもある魔女は，我が子の利のために，美しい継子と醜い我が子とのすり替えを行うが[25]，いずれもその馬脚を見破られる。つまり，1人の魔女を除き，全ての魔女の企ては最終的には失敗に終わる。メルヘンの中の魔女とは，主人公の力に乗り越えられるべき悪の存在なのである。

唯一例外的に魔女がその企てを成功させるKHM43では，両親の制止にもかかわらず，魔女のもとを訪ねるわがままな娘が，魔女に丸太に変えられた挙句に燃されてしまい，物語はそこで終わる。ハッピーエンドではないという点で，メルヘンの域を明らかに越えているが，この物語は今ひとつ別の意味においても例外的な特徴を持っている。この物語には，悪魔(Teufel) という語も同時に用いられているが，Hexe という語が用いられている20話の中で，これは唯一の例である。グリムの『ドイツ伝説集』には，悪魔と魔女との結びつきを描いた話が複数収められているが[26]，

『メルヘン集』にはそのような話は存在しない。このことは，伝説とメルヘンとの性格の相違を表すと同時に，メルヘンの魔女が，宗教的背景から切り離され，キリスト教の思想に支配された存在としてではなく，あくまでも魔力を持った一人の悪役としてのみ扱われていることを示している。KHM43の魔女は，メルヘンの魔女を逸脱した，『メルヘン集』の中で唯一の，企てを成功させ，悪魔の影をも感じさせる恐ろしい魔女だということができる。

このように，メルヘンの中の魔女は，KHM43を除き，主人公の対立人物として，主人公を妨害し，試練を与えることによって，救済の必要とされる状況へともたらす機械的な役割しか持たされていない。機械としてのこの限定的な役割は，同時に魔女をあらゆる背景からをも切り離し，そのため，メルヘンの魔女の行動自体からキリスト教的背景が垣間見えることは少ない。

この魔女たちの役割と重なるのが，魔法使いの女たちである。彼女たちもまた主人公に乗り越えられるべき悪の存在である。KHM12『ラプンツェル』の魔法使いの女は，先述のとおり，本来運命の女神たる妖精であったため善悪両面を有する存在であったが，善と悪との対立構造を鮮明にしていったグリム兄弟の書き換えの方針のもと，魔法使いの女に書き換えられ，それにともない言葉遣いに毒々しさが加えられるなど，悪の面が強調され，魔女に近い存在へと変貌していった。しかし，その一方で，魔法使いの女が赤子を両親のもとから奪うのは，魔法使いの女の畑に野菜を盗みに入った父親との交換条件に基づいた行動であり，何の理由付けもなく悪行を働く魔女とは異なる要素も，運命の女神としての起源をもつKHM12の魔法使いの女に限っては認めることができる。しかし，それ以外の3人の魔法使いの女たちは，KHM69では娘を小鳥に変えてしまい，またKHM134では人の命を奪ったり，魔法の眠りにつかせたりし，さらにKHM197では自分の息子たちを鷲や鯨の姿に変えてしまうが，いずれの場合もやはり最終的には主人公たちに乗り越えられることとなる。これらの魔法使いの女の所業は，いずれも魔女の所業と置き換えたところで何ら

不都合は生じない。このように，その役割の面において，魔女と魔法使いの女を明確に分けるものは存在せず，KHM69『ヨリンデとヨリンゲル』の魔法使いの女の描写を見ても，グリム兄弟自身が，メルヘンの中でこの両者を極めて近いものと認識していたことが明らかとなる。「からだが二重におれたばあさんが，その灌木の中から出てきました。黄色くて，やせっぽちで，目だまは大きく，まっ赤で，ひんまがった鼻の先は顎までとどいています」[27]この魔法使いの女の描写は，赤い目を持っているところをはじめ，明らかに魔女の描写と一致する。グリム兄弟は，魔法使いの女と魔女とを，悪の陣営の魔性の女性として，その機能の上では，峻別していなかったことが推測できる[28]。

4．援助者としての「魔女」—賢女と老婆

それでは，賢女と老婆はどのような役割を果たしているのであろう。まず，賢女であるが，本来運命の女神である彼女たちは，善悪を兼ね備えた両面的な存在である。しかし，グリム・メルヘンの中で，その両面性を兼ね備えているのは，KHM50『いばら姫』に登場する賢女たちのみである。このメルヘンにおいて，賢女たちはいばら姫に死を予言することによって窮地に陥らせると同時に，死ではなく百年の眠りにつくだけであるという予言を与えることによって救済をもする。誕生の宴の席でのこのような予言は，まさに運命の女神としての役割である。しかし，この賢女の両面性を読み取ることのできるメルヘンは，他にはない。グリム・メルヘンにおける賢女の役割を端的に表している部分が，KHM179『泉のそばのがちょう番の女』の結末部分にある。「ひとは，あのばあさまを魔女(Hexe) と思っていますが，そうではなく，あれは，人のためをはかってくれる賢女であったということ，これだけはたしかです。」[29]つまり，魔女が悪の代表者であるのに対し，賢女は主人公の側，つまり善の側に立った魔力を有する女性なのである。実際に，KHM50の中の死を予言する1人の賢女を除くと，グリム・メルヘンの全ての賢女たちは，窮地に陥っている主人公を救済する。KHM49では魔女の娘である王妃から隠れ，子

どもたちが潜んでいる森の中の城への道案内をする糸玉を渡してくれ，KHM56とKHM141では，魔女の術の破り方を，さらにKHM122では，善良な兵士に豊かになる方法を伝授してくれる。そして，KHM179では，王の怒りを買い森に追放された王女を，幸せな結婚の準備が整うまでの間かくまう。いずれも，主人公つまり善の援護者としての役割である。特に注目すべきは，魔女との対立関係である。KHM56『恋人ローランド』とKHM141『小羊と小ざかな』に明確に表れているが，魔女によって窮地に立たされた主人公を，賢女が魔女の術を破ることによって救い出している。悪の魔女，ここでは決して魔法使いの女ではない，に対して，善の賢女という構図が出来上がっている。KHM50の運命の女神の色合いを強く持った賢女を除くと，賢女たちはみな，窮地から主人公を救済するという，魔女の裏返しの存在なのである。

それでは，最後に老婆はどうであろうか。魔女や，魔法使いの女たちも，老婆として表現されることが多くあるが，ただ老婆とのみ語られている女性たちは，魔女たちとは全く異なった役割を果たしている。この老婆は8話に登場するが，KHM150は断片的であり，メルヘンの形をなしているとは言いがたいので，ここでは検討の対象からははずす。残り7話の老婆たちに共通していえることは，難題に直面している主人公に，手を差し伸べ，運命を切り開く助け，ないし助言を与えるという点である。例えば老婆は，12人の兄たちが鴉に姿を変えてしまい，独りで途方に暮れている妹に兄をもとの姿に戻す方法を教えてくれたり(30)，身の上話を聞いた上で直面している難題を片付けてくれたり(31)する。運命にかかわるという点において，この老婆たちも賢女同様，明らかに運命の女神としての性格を持ち合わせる。しかし，賢女がメルヘンの善悪の対立構造の中で，魔女に対立する善の存在として，魔女の術と直接相対し，それを破ることがあるのに対し，老婆の現れるメルヘンの中に魔女が登場するものは1編もなく，魔女との対立構造の埒外にとどまっている老婆は，その助言によって主人公の進むべき道を示し，その運命を好転させる援助者の役割に終始するのである。また，魔女や賢女たちが，姿を現さないままに，メルヘンの

中でその機能を果たすことがあるのに対し，老婆は必ずその姿を現し，血の通った人間としての温もりを感じさせる。この印象は，７人の老婆のうち３人までもが，現れるとまず主人公に対し，「どんな心配ごとがあるのだか，遠慮なく，あたしにうちあけてごらんよ」[32]と語りかけることからも感じられる。老婆たちが，賢女同様，グリム・メルヘンの中では善の陣営にいることは，KHM186の老婆に対し，gut という形容詞が付せられていることからも明らかであるが，賢女が救済者として機能しているのに対し，老婆は助言者としての色合いが濃い。

５．「魔女」たちの最期

以上，グリム・メルヘンの中の４人の「魔女」たちをその背景，登場の仕方，機能と見てきたが，最後にその退場の仕方にも触れる必要があるだろう。善と悪の陣営に分かれたこの4人の「魔女」たちであるが，まず善の陣営の賢女と老婆に関しては，そのメルヘンの舞台からの退場の仕方が描かれている物語は１編もない。主人公の援助者である賢女と老婆は，その救済者ないし助言者としての機能を果たし終えると，主人公が中心のストーリーを追う物語であるメルヘンには不要な存在となり，その後については語られない。

それに対し，主人公によって乗り越えられるべき存在である悪の陣営に属する者たちには，悪の報いが待ち受けている。メルヘンの中では，悪は必ず罰せられなくてはならない。機能の面においては，救済を必要とする状況に主人公たちを陥らせるという点において共通しているものの，魔女と魔法使いの女の最期を見ていくと，両者の間には明らかな線が引かれていることが浮かび上がってくる。グリム・メルヘンに登場する15人の魔女たちのうち，10人までもの魔女には悲惨な最期が待ち受けているのに対し，４人の魔法使いの女たちは，同様の機能を果たしているにもかかわらず，その最期がメルヘンの中に描かれているものが１編もない。魔女たちの最期は，火あぶり，野獣による八つ裂き，溺死，絞首をはじめ，藪の中で棘に刺され死ぬまで踊らされる[33]，釘を内向きに打たれた樽に入れら

れ引き回される等々，凄惨を極める。これらのシーンには，明らかに魔女裁判における拷問や処刑の方法が反映されている。グリム・メルヘンの中で最も有名なヘンゼルとグレーテルの魔女の最期も，パン焼き窯によく似た構造の窯の内側に縛り付けるという火刑の方法[34]を連想させる。メルヘンの魔女は，悪魔と結託しているという構図を持たず，キリスト教的背景から切り離され，機械的な役割を果たしているのみであるにもかかわらず，その最期のシーンには，魔女裁判とその処刑の光景がくっきりと焼きついている。このことは，18世紀末に至るまでドイツ語圏において続いていた魔女狩りという歴史的事実が，グリム兄弟の生きた時代にとって，いかに近い過去の衝撃的な出来事であったかを物語っている。魔女は，その悪行がたとえ未遂や失敗に終わったとしても，処罰されねばならない存在なのである[35]。悪の陣営に属する，魔女と魔法使いの女は機能の上では重複するが，その待ち受ける最期という点において，性格を異にする。従って，グリム・メルヘンの中で，同一の女性に対し，魔女と魔法使いの女という二つの呼称が用いられるということは決してない[36]。

以上，4人の超自然的な力を持った女性たち，魔女，魔法使いの女，賢女，老婆の姿を，グリム・メルヘンの中に，その登場から退場までを追ってきた。悪の陣営に属する魔女と魔法使いの女，そして善の陣営に属する賢女と老婆という図式の中，同じ陣営の側に属する者たちの間にも，その機能や最期において明らかな違いが存在する。それぞれに印象的な役割を果たす4人の女性たちではあるが，中でも，主人公の援助者である賢女や老婆たちよりも，悲惨な最期の待つ対立人物である魔女の方が，その登場回数からも，最も強い印象を与える存在であることは否めない。実際に，年老いた魔女の姿がメルヘンという文芸の中に定着するのは，このグリム・メルヘン以降のことである[37]。また，その時期に相前後して19世紀以降，魅力的な少女や恋人のことを，魔女にたとえる用法が見られるようになった[38]。これは，企てを完遂することの出来ない，ある意味で恐ろしくない，グリム・メルヘンの魔女たちの姿が，魔女裁判の光景に勝った

ということではないであろうか。そして，今日の悪役を演じることの少なくなった，かわいらしい「魔女」の姿の萌芽をも，恐ろしくないグリムの魔女の中に感じ取ることができる。

注

（1） Kinder- und Hausmärchen. 以下『メルヘン集』と省略する。また，特定しない限りこの『メルヘン集』はグリム兄弟自らの手による最後の版となった1857年刊行の第7版を指す。また，この『メルヘン集』の何番目に収録されているメルヘンであるかを『メルヘン集』の頭文字を取ってKHMxxと表記する。メルヘンの邦題ならびに引用は全て以下の邦訳により，この先，以下からの引用は，『グリム童話集（x巻）』と示す。
金田鬼一訳，岩波文庫『完訳グリム童話集（全5巻）』1979.

（2） KHM1『蛙の王様』，KHM11『兄と妹』，KHM15『ヘンゼルとグレーテル』，KHM22『なぞなぞ』，KHM27『ブレーメンのおかかえ楽隊』，KHM43『トゥルーデおばさん』，KHM49『六羽の白鳥』，KHM51『めっけ鳥』，KHM56『恋人ローランド』，KHM60『二人兄弟』，KHM65『千びき皮』，KHM85『黄金の子ども』，KHM116『青いあかり』，KHM122『キャベツろば』，KHM123『森のなかのばあさん』，KHM127『鉄のストーブ』，KHM135『白い嫁ごと黒よめご』，KHM169『森の家』，KHM179『泉のそばのがちょう番の女』，KHM193『たいこたたき』。

（3） KHM1, 127, 169.

（4） KHM12『ラプンツェル』，KHM69『ヨリンデとヨリンゲル』，KHM134『六人のけらい』，KHM197『水晶の珠』。

（5） KHM49『六羽の白鳥』，KHM50『いばら姫』，KHM56『恋人ローランド』，KHM122『キャベツろば』，KHM130『一つ目，二つ目，三つ目』，KHM141『小羊と小ざかな』，KHM179『泉のそばのがちょう番の女』」。

（6） KHM9『十二人兄弟』，KHM29『黄金のけが三本はえてる鬼』，KHM96『三羽の小鳥』，KHM103『おいしいおかゆ』，KHM125『悪魔と悪魔のおばあさん』，KHM133『おどりぬいてぼろぼろになる靴』，KHM150『こじきばあさん』，KHM186『ほんとうのよめさん』。

（7） Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearb. von Elmar Seebold. 23. erw. Aufl. Berlin/New York 1995, S. 373.

(8) Ebd. S. 904.
(9) Grimm, Jacob: Deutsche Mythologie. Basel 1835, 1953, S. 329ff.
(10) Ebd. S. 329 u. Nachtrag S. 113.
(11) KHM15, 22, 49, 60, 85, 116, 122, 123, 179.
(12) KHM15, 22, 49, 85, 116, 123.
(13) KHM11, 22, 56, 135.
(14) 『グリム童話集（1巻)』165ページ。
(15) 『グリム童話集（5巻)』164ページ。
(16) KHM22『なぞなぞ』は，1837年版より収録されており，1837年版では，mit ihren roten und feurigen Augen となっているが，決定版では feurig が欠落している。決定版の描写の方が短い珍しい例といえよう。
(17) KHM49.
(18) KHM1.
(19) KHM11.
(20) KHM49.
(21) KHM60, 85.
(22) KHM43, 123.
(23) KHM169.
(24) KHM11,15, 22, 51, 56. 人喰いの意図を明らかに持つのは，KHM11, 51.
(25) KHM11, 135.
(26) Vgl. Brüder Grimm: Deutsche Sagen. Bd.1. Hrsg. von Hans-Jörg Uther. München 1993, S. 108f. u. S. 169f. 第1巻第87話や，第174話に悪魔と魔女との関係が触れられている。
(27) 『グリム童話集（第2巻）』328ページ。
(28) Vgl. Enzyklopädie des Märchens. Hrsg. von Rolf Brednich u.a. Berlin/New York 1990, Bd.6, S.962.（以下，EM と略す） 魔女裁判の隆盛により16世紀以降に Hexe という語が定着する以前は，Zauberin という語が用いられていた。
(29) 『グリム童話集（5巻)』60ページ。
(30) KHM 9『十二人兄弟』。
(31) KHM186『ほんとうのおよめさん』。
(32) 『グリム童話集（5巻)』95ページ。KHM186.
(33) KHM56『恋人ローランド』の魔女の最期だが，KHM110『いばらの中のユダヤ人』を連想させる。茨や棘のあるものは，悪や魔術を防ぐ力があると民間では信じられていた。今日でも，魔女よけとして Kreuzdorn が用いられることがある。

(34) 上山安敏『魔女とキリスト教』講談社，1998年，236ページ。

(35) なかには，KHM122『キャベツろば』の魔女のように，実行犯は魔女の娘で，魔女自身は何も手を下していないにもかかわらず，魔女の娘は許され主人公と結婚し，魔女は殺されてしまうというメルヘンすらある。

(36) KHM149『うつばり』において，Hexenmeister と Zauberer が同一の男性に対し用いられている例が一つだけある。

(37) EM. Bd.6, S. 966.

(38) Wörterbuch der deutschen Umgangsprache. Hrsg. von Dr. Heinz Küpper. Stuttgart 1987, S.344.